

Interview 穂谷友子

障子の国の ティンカーベル

“大人にならない大人”のための一人芝居を再び



野田秀樹 × マルチェロ・マーニ × 穂谷友子 傑出した三つの才能が紡ぐ永遠の少年と妖精の恋物語

世界中で愛され続ける童話の主人公ピーター・パンが、相棒ティンカーベルと日本に現れ、恋に落ちたとしたら……。奇想天外かつスケールの大きな物語と、ふんだんに織り込まれた言葉遊び。野田戯曲の魅力をたっぷり持ちながら、上演機会の少ない『障子の国のティンカーベル』に昨年、穂谷友子は新たな命を吹き込んだ。

「最初にやりたいと思ってから10年近い時間を経て、ようやく実現した待望の公演。一人芝居は父・矢代静一が私に残してくれた『弥々』を20年以上上演し続けており、過酷さは身に沁みているはずでしたが、今作は『弥々』のゆうに3倍は大変。時空を自在に行き来し、重力にも逆らうような作品世界を体現しなければなりませんから。でもだからこそ余計に、お客様と野田さん自身にも喜んでいただけたのは本当に嬉しかった。初演の千秋楽の翌日、野田さんはメールで『再演を考えて欲しい』と言って下さって。『すぐにも上演しなければ肉体的に上演できなくなってしまうかも』と早々の再演を決断しました」
穂谷は今作を「人生に悩む若き野田秀樹が、葛藤の末に演劇とともに生きる決意を表明した作品」だと言う。

「東大法学部に籍を置き、将来は官僚や、人を裁く側の人間にもなれた野田さんが演劇の世界に残り、“大人にならずに生きる”ことをピーターに託して宣言する。おもちゃ箱をひっくり返したような混沌とした劇世界には、野田さんの悩みや痛みを象徴するものが散りばめられている、と初演の稽古中、演出のマルチェロや野田さん自身ともディスカッションをさせていただく中で気づいたんです。でも前回は、作品の本質にやっとたどり着いたと思った直後に公演開始。だから再演では、戯曲の本質をより深く伝えられるよう掘り下げたいと思っています。同時に、私自身も作品をもっと楽しめるようになるのが課題。初演はがむしゃら過ぎて、記憶にないことも結構多くて(笑)」
「去年は必死、今年は決死。覚悟の質が変わりました」と言う彼女の表情は笑顔だが、その目は真剣そのもの。

「良い作品は本棚の奥に眠らせてはいけない。口火を切る人間がいれば、きっと若い世代が後を引き継いでくれるはず。そんな初演時の想いが、今回はさらに強く切実なものとして私の内側にあるんです。いつの時代にも存在する若さゆえに悩む者に語りかけ、救える作品ですから、確実にバトンを渡していかなければ。この公演は、あとに連なるティンカーベル予備軍への呼びかけ。一人でも多くの方に、目撃・体験していただきたいと思っています」

取材・文:尾上そら

詳細はP9へ

主催:東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団) / 東京都アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)

7月12日(日)~20日(月・祝) シアターウエスト ※20日は追加公演

作:野田秀樹 演出:マルチェロ・マーニ 出演:穂谷友子 パフォーマー:野口卓磨

オックスフォード大学演劇協会(OUDS)来日公演

「ロミオとジュリエット」(英語上演/日本語字幕付)

シェイクスピアも驚く大胆アレンジに挑戦!

1885年の創立以来、ジュディ・デンチ、ローワン・アトキンソン、ヒュー・グラント、フェリシティ・ジョーンズら数多の名優を輩出してきたオックスフォード大学演劇協会(OUDS=Oxford University Dramatic Society)。130年の歴史と伝統を誇り、シェイクスピア作品の原語上演が好評なイギリスの由緒正しい学生劇団が、今年のはあ“悲劇”に挑む。とはいえ、誰もが知る古典そのものではない。若者らしいフレッシュな感性で大胆なアレンジが施され、舞台は中世ヴェローナから暴力と悪政がはびこる近未来ヴェローナへ、ロミオもジュリエットも女性という同性2人の恋物語になっているというから、仕上がりに期待がふくらむ。小田島雄志氏翻訳の日本語字幕を見ながら、本場のクイーンズズイングリッシュで公演を堪能したら、OUDSメンバーとの交流会「Meet&Greet」や「アフター・トーク」にも参加して思いっきり楽しもう。

8月19日(水)・20日(木) シアターウエスト

詳細はP12へ

作:ウィリアム・シェイクスピア 演出・出演:オックスフォード大学演劇協会(OUDS)

主催:東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団) / 豊島区



気づかいルーシー

松尾スズキ 対談 ノゾエ征爾 SUZUKI MATSUO 対談 SEIJI NOZOE

大人が楽しんでいるのを、こどもが
背伸びして観て楽しむような舞台に。



こどものための演劇作品を創作、上演することが、2009年の就任当初から、野田秀樹芸術監督の目標のひとつだった。それが、人気作家・演出家・俳優の松尾スズキの絵本『気づかいルーシー』の音楽劇という形でいよいよ実現する。松尾の指名で脚本・演出を手がけるノゾエ征爾は、とある演劇ゼミの松尾クラスで1年学び、岸田戯曲賞も受賞した実力派。師弟対談は和やかに進んだ。

松尾 これ、夢で見た話をほぼそのまま書いたんだよ。夢の中で何かを考えていることがよくあるんだけど、おとぎ話を考えるというシチュエーションが夢に出てきて、そこで思いついたのがこのストーリーだった。
ノゾエ ずいぶんファンタジーな夢ですね(笑)。僕は、その時に書いている脚本の最後のピースが夢で見つかることがよくありますけど。
松尾 もともと“気づかい”は気になる問題ではあるんだよね。自分自身が、たとえば人を飲み誘うにしても、二重三重に断られた時のパターンを考えて心の保険を用意しておかないと誘えない人間だから。

ノゾエ 同じです。気づかひのループにハマって、結局なにもできないのが基本、みたいなところがあります。

松尾 ノゾエくんのつくる作品にも心が空回りしてる人の話が結構あるよね。やってもらおうと思ったのはそれも理由のひとつだし。でも1番大きな理由は、高齢者の施設で演劇をする仕事を何年もしているでしょ?だからこどもにも興味があるんじゃないかと思って。『気づかいルーシー』は絵本ではあるけど、特にこども向けを意識したわけではなかったのね。でも舞台にするなら、自ずとその部分も考えることになるだろうから。

ノゾエ そう言えば僕、戯曲を書く時にはいつも自分の中に“今回のテーマ”みたいなものがあるって、それをメモっておくんですけど「大人向けの絵本」というフレーズはよく書いています。絵本の、シンプルさとか、大胆さとか、妙な奥行きとか、そういう感覚を舞台でもできたらとよく課題にしてて。

松尾 へえ、そうだったんだ。

ノゾエ 松尾さんが今おっしゃったように、高齢者の施設で演劇をやっていると、小さいこどもと一緒に観ていることがよくあって、お話をいただいた時、感覚としてはすぐにフィットしたところがありました。だからあまり悩ま

ずに「やります」とお返事したんです。

松尾 うん、ノゾエはきっと断らないだろうというも、声をかけた理由(笑)。

絵本にはない音楽の要素を融合させて

ノゾエ 読まれましたね(笑)。最終的には、大人が観て楽しめるものをつくって、こどもはちょっと背伸びして入り込んで観るような、のぞいてみたら楽しかったというところに行き着けたらと思っています。

松尾 こどもはなかなかわかってるからね。「これは通じないだろう」とか、ナメてかかっちゃダメだよ。それと音楽劇になるのも楽しみなんだ。曲はいっぱい入るの?

ノゾエ 生演奏ですし、わりと入れる予定です。音楽劇は初めてなんですけど、もともとミュージカルが好きで、自分の劇団でもよく歌を入れるので、そこは僕自身も楽しもうと思ってます。音楽と演奏をお願いしているのが元SAKE ROCKの田中馨くんで、本当すごいセンスというか、絶対の信頼をしているので、こっちが何を投げて大丈夫だろうと。

松尾 僕もミュージカルが大好きだし、音楽的な要素が入るのは絵本ではできないことだからいいよね。(絵本の世界観と)うまく融合して楽しいものになれば全然オッケー。

ノゾエ 全体的には楽しいものにつつつ、感覚的にリアルな部分も入れ込みたいという思惑もあるんです。たとえば、皮をむくとすごく痛いんだよ、とか。

松尾 いろんな皮をむく話だからね(笑)。でも童話って、ちょっと残酷な部分があるでしょ、『因幡の白兔』とか。そういう意味ではむしろスタンダードかもしれない。好きなようにやってください。

取材・文:徳永京子

詳細はP12へ

8月22日(土)~31日(月) シアターイースト

原作:松尾スズキ(千倉書房「気づかいルーシー」) 脚本・演出:ノゾエ征爾

出演:岸井ゆきの / 栗原 類 / 川上友里(はえぎわ) / 山口航太(はえぎわ) / 山中 崇 / 小野寺修二 演奏:田中 馨 / 森 ゆに

主催:企画制作:東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団) 主催:フジテレビジョン 特別協賛:三菱地所

芸劇eyes ベッド&メイキングス「墓場、女子高生」

7月17日(金)～26日(日) シアターイースト 詳細はP10へ



生き返っても退屈な愛しい日々。

日本の演劇界で影響力も注目度も圧倒的に大きい岸田國士戯曲賞で、今年、最終候補にノミネートされ、受賞は逃したものの、審査員から高い評価を集めた福原充則。するりと耳に飛び込み、笑いの神経を多彩に刺激しながら、気が付くと深く胸に刺さっているそのせりふの魅力が、いよいよ多くの人に広まる時期が来たようだ。

その福原と俳優の富岡晃一郎が立ち上げたユニットがベッド&メイキングスで、『墓場、女子高生』はその旗揚げ公演でも上演された傑作。ストーリーは荒唐無稽で、自殺した女子高生が、オカルト研究会の呪術で生き返ってしまい、同級生達と再び生き直すことになる……というもの。しかしそこには、10代＝明るい青春、あるいは自殺＝苦悩という単純な図式はない。あるのは、蘇生という裏返しを生から、生きていくことの価値と孤独を均等に照射する秀逸な眼差し。福原ワールドを未体験の人にもぜひお薦めしたい。

文：徳永京子

作・演出：福原充則
 出演：清水葉月／根本宗子／青山美郷／望月綾乃／山田由梨／杉ありさ／葉丸あすか／佐藤みゆき／猫背 椿／竹森千人／中山祐一朗／富岡晃一郎

主催：ベッド&メイキングス
 提携：東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)

ミュージカル「100万回生きたねこ」

8月15日(土)～8月30日(日) プレイハウス 詳細はP12へ



成河 深田恭子

シニカルでキュートな「ねこ」にまた会える。

佐野洋子のロングセラー絵本『100万回生きたねこ』がイスラエルの振付・演出家インバル・ピント&アブシャロム・ポラックによりミュージカル化されたのは2013年のこと。2人は日本に数カ月滞在し、作品をゼロから作り上げた。その稽古場の刺激的だったこと！一角でインバルが独創的な振付を自らが舞いながら教え、脇ではアブシャロムが演技指導を行う。美術と衣裳はすべてインバルがデザインし、片隅に魚の頭や家、インバル手描きのドレスが並ぶ。珍しいアナログ楽器が多数持ち込まれ…と、稽古場全体が「素敵！」を詰め合わせたおもちゃ箱のようだった。

初演は大人気を博し、今回は待望の再演となる。「ねこ」が生死を繰り返した末、白いねこ出会う。生きること、死ぬこと、愛とは何か…。まるで飛び出す絵本のようなファンタジックな世界。白いねこを演じる深田恭子は初舞台。成河とともに、しなやかなねこで魅了してくれることだろう。

文：三浦真紀

原作：佐野洋子「100万回生きたねこ」(講談社刊) 演出・振付・美術：インバル・ピント、アブシャロム・ポラック
 出演：成河 深田恭子／近藤芳正 田口浩正 石井正則／銀粉蝶 藤木 孝 ほか

主催：TBS/ホリプロ
 共催：東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)
 協力：オフィス・ジロチョー/講談社 企画制作：ホリプロ

カタルシツ「語る室」

9月19日(土)～10月4日(日) シアターイースト 詳細はP14へ



左から浜田信也、安井順平、中嶋朋子

人は自分の物語を語らずにられない。

SFの構造を使いながら、目の前にあるものや場所や人、記憶、自分という存在の不確かさを問い続ける作・演出家、前川知大と、彼が率いる劇団イキウメ。ファンが多いだけでなく、業界内外の評価が高く、代表作のひとつ『太陽』は映画化され、来年に公開が控える。

その“別館”として一昨年誕生したカタルシツ。イキウメの世界観からこぼれる作品を発表する場として、これまではドストエフスキーの『地下室の手記』を現代の日本に置き換えた作品を、ふたり芝居とひとり芝居で上演してきた。秋の芸劇では、語りテーマにしてオリジナル作品に挑戦する。芥川龍之介の『藪の中』に習わずとも、人間には主観があり、ひとつの出来事を誰かと完全に共有することはできない。食い違いや矛盾を抱えながらも語り合う人々の姿を、劇団員と、中嶋朋子をはじめとする客演とともに描いていく。正面から物語に向き合う前川の新しい挑戦に期待したい。

文：徳永京子

作・演出：前川知大
 出演：浜田信也／安井順平／盛 隆二／大窪人衛／木下あかり／板垣雄亮／中嶋朋子

主催：イキウメ/エッチピ
 提携：東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)

穂の国とよはし芸術劇場PLAT Produce「父よ！」

10月2日(金)～12日(月・祝) シアターウエスト 詳細はHPへ



2013年6月初演時舞台写真 撮影：谷古宇正彦

わずらわしくて愛おしい、家族と人生を軽やかに

母亡き後、独居となった老父の面倒を誰がみるか？ 自分たちも老境に差し掛かっている四兄弟が久しぶりに実家に集うが、話し合いは一向に進まない。そこに謎の女が現れて……。

2013年4月に開館した穂の国とよはし芸術劇場PLATアールスペース(小劇場)柿落とし公演が、初演のキャスト&スタッフで待望の再演となる。豊橋市出身で同館の芸術文化アドバイザーを務める平田満主宰のアル☆カンパニー、そして穂の国とよはし芸術劇場の共同企画によるもので、作・演出は劇団ONEOR8主宰の田村孝裕。岸田國士戯曲賞に3回ノミネートという注目の俊英は、同じく作・演出を手がけた「ええから加減」で上方漫才コンビ役の藤山直美と高畑淳子に菊田一夫演劇賞をもたらした。

老いと介護、そんなシリアスなトピックを孕みながら実に軽やか。巧みな役者陣がコミカルに演じて温かな余韻を残し、誰も自分の家族を思わずにいられない。

作・演出：田村孝裕(ONEOR8)
 出演：平田 満／ベンガル／徳井 優／花王おさむ／井上加奈子

主催：公益財団法人豊橋文化振興財団
 共催：東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)

COMING UP NEXT 2015.10-12 演劇ラインナップ



カントール生誕100年記念企画(仮題)

10月・12月
 シアターイースト・アトリエイースト

1982年国際演劇祭祭賀フェスティバルでも紹介された『死の教室』をはじめ、『くたばれ! 芸術家』など衝撃的な作品で20世紀の演劇シーンに革命を起こしたポーランドの演出家・舞台美術家のタデウシュ・カントール。生誕100年を記念し、10月と12月の二期に渡り、映像上映や素描の展示、タニノクロウによるオマーージュ作品の上演、シンポジウムなど、多角的な企画を実施。世界の演劇・美術界に多大な影響を与え、日本でも寺山修司らと深い関係を持つことで知られる鬼才の実像に迫る。

企画詳細についてはHPにて順次アップ致します。



ルーマニア国立ラドゥ・スタンカ劇場来日公演
 「ガリバー旅行記」「オイディプス」

演出：シルヴィウ・ブルカレーテ 出演：オフィリア・ポビ ほか
 10月15日～18日(予定)「ガリバー旅行記」
 10月21日～23日(予定)「オイディプス」
 プレイハウス

2013年『ルル』でプレイハウスに馬蹄形の客席を出現させ、妖しくも鮮烈な舞台が話題を呼んだ、東欧を代表する演出家シルヴィウ・ブルカレーテ。再びルーマニア国立ラドゥ・スタンカ劇場製作のブルカレーテ演出2作品を招聘し連続上演。是非劇場でその濃密な世界を体験して。

チケット発売：8月上旬予定

芸劇eyes

てがみ座
 「地を渡る舟」

作：長田育恵
 演出：扇田拓也
 10月23日(金)～11月1日(日)
 シアターイースト
 チケット発売：後日HPにて発表

バルコ

寺山修司生誕80年
 TERAYAMA WORLD IN GEIGEKI 2015
 「レミング～世界の涯まで連れてって～」

作：寺山修司
 演出：松本雄吉(維新派)
 12月6日(日)～20日(日) 予定
 プレイハウス
 チケット発売：10月予定

Roots vol.3

「書を捨てよ町へ出よう」

作：寺山修司
 演出：藤田貴大(マームとジブシー)
 12月5日(土)～27日(日) 予定
 シアターイースト
 チケット発売：10月17日(土) 予定